

教室における外国語教育

青 木 睦 子

目 次

1. はじめに	1
2. 近年の英語教育	2
3. 学習指導要領と言語習得	3
4. 非言語コミュニケーションの役割	4
5. 外国語教育と心理学のかかわり方	7
6. 教室における教師と学習者の相互関係	11
7. 外国語教育と社会のかかわり方	16
8. 結 論	19
参考文献	20
引用文献	21

1. はじめに

最近マス・メディアの繁栄に伴い、世界の動向が毎日手にとる様にわかり、異文化との関係が予想する以上に身近なものになって来ている。英語を教授する立場にある者は、少なくともこの広い世界に目を向けて英語を指導し、異なった文化に対する関心、感覚を自然に養う様に心がけ、英語の授業の活性化をはかる必要があるのではないだろうか。

1970年代から言語学、心理言語学、社会言語学等の研究がさかんになり、そのおかげで言語理論、言語習得理論等が唱えられ、1980年代に実践的な研究いわばコミュニケーションに役立つ指導法が研究されるようになって来ている。平成6年の学習指導要領が改善されてから、4つの領域のうち「聞く」「話す」の分野に力を入れる様に心がけているのではないだろうか。教室の中では絶えず学習者の耳に英語がインプットされる環境を与えるべきでしょう。教科書以外のテープ、ビデオを使用して、出来るだけ教師と学習者一人一人との会話、学習者どうしのやりとり（role play）の時間を作り、教室内がいつも和気藹藹の雰囲気漂っているのが望ましいのである。そして教師は学習者一人一人に正しい英語力をつけるように、アドバイスする事が大切である。

以上の様に教師と学習者が信頼関係を保ち、活気に満ちた授業を展開すれば、自ずと効果的授業が誕生するに違いないと確信する。今回は教室での英語教授法のあり方の1部を報告したいと思う。

2. 近年の英語教育

英語は明治時代以来日本人にとっても重要な外国語として学習の対象になっている。時代の流れと共に、学習指導要領がその都度改善されている。

特に平成6年の「オーラル・コミュニケーション」の導入は、英語教育界に大きな変貌を与えた。

その後、英語教育に対する考え方や概念が変わって来ている。それは言語学習が従来の文法を中心とした構造アプローチからコミュニケーションのための学習へと流れつつある。いいかえれば、従来の伝統的な教授法はレクチャー型即ち教師主導型で、文の構造に焦点があてられ、いかに正しい文章を形成するかという文法用法に沿ったものであったと言える。近年の英語教育は発信型の授業で、learner-centered approach にあり、学習者の自主的な活動や発表を生む学習が多くなって来ている。教師はあくま

で傍観者として授業の流れを把握し、時には適切なアドバイスを与え、授業の展開の円滑油になる様に務めるべきであると考えられて来ている。

教育英語には数限りなく多くのカリキュラムがあるが、その中でも“role play”に費やす時間を多くとり、人間関係、心の動き等を理解しながら、今後の授業を理想的なものへと近づこうと努めている教師が多いと思う。

3. 学習指導要領と言語習得

平成元年3月15日に学校教育法施行規則の一部を改正するとともに、幼稚園教育要領及び小・中・高等学校の学習指導要領と全面的に改訂した。その改善の基本方針は、中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視する……途中省略。

外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、外国語の実践的な能力を身に付けさせるとともに、外国についての関心と理解を高めるよう配慮する……以下省略⁽¹⁾

以上の様に平成元年の指導要領では、コミュニケーションの一手段の言語を通しての表現力の育成と強化、積極的な態度を養う。国際化の進む中において、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重する事である。国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きる為には、まず我が国の文化、伝統に関心や理解を深めるとともに日本人としての自覚を持って新しい文化の発展に貢献する事が必要になる。それに伴って諸外国の文化、社会、伝統に目を広げ世界と日本とのかかわりに自然に関心を持つ様になってくると思う。⁽²⁾

では英語教育に携わっている者として、今回の指導要領の教育的な面、言語運用に関しての理想的な教育とは何か。4つの領域（読む、書く、聞

く、話す)の言語活動のバランスのとれたもので、特に聞く事、話す事は特に重要視する必要がある。学習者の立場から考えてみると自主的に表現ができ、意志伝達が出来なければならないであろう。時が立つにつれて‘talk with’の源流が生まれ言語的(verbal)と非言語的(nonverbal)のコミュニケーションが自然に身につき、学習指導要領の基本方針であるコミュニケーションの能力と積極的な態度が生れて来る。

いわば学習者が自ら進んで授業に臨み、学習者と教師のバランスのとれた相互関係が生まれ、communicationの語源のとおり「分配、分ける」の如く、話し手聞き手の考えを「分配」し意志伝達が生じて来る様な授業が理想である。今回は学習者のコミュニケーションの力と態度の育成にスポットライトをあて、教師の授業進行のあり方を(6.教室における教師と学習者の相互関係)の中で考察していきたいと思う。

4. 非言語コミュニケーションの役割

話し手と聞き手がコミュニケーションの場で、互いに聞き手になったり、話し手になったりというように、各々の役をバランスよく交替しながら、情報交換を遂行していく。その時言語的(verbal)と非言語的(nonverbal)メッセージを媒介にして相互に影響を与えあうのは承知のとおりである。非言語とは言語以外の手段を通して行うコミュニケーションのことである。非言語コミュニケーションの研究のリーダーの1人、Birdwhistellは、対人コミュニケーションを次の様に分析している。——二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ(コミュニケーションの内容)は全体の35%にすぎず、残りの65%は話しぶり、動作、顔の表情、アイコンタクト、相手との間(ま)のとり方等。ことば以外によって伝えられる言葉以外の数多くの方法が対人コミュニケーション用の記号として使われている「ことばならざることば」が人間のあらゆるコミュニケーションに寄与するところ大である。

非言語によるさまざまな伝達方法を分類してみよう。

◎非言語的、音声的、周辺言語について

1. 声の質—ささやき、呼び、あらたまった、やさしい、鼻にかかったためいき、驚き等、これらは音声であって言語ではない。いわばスペクトル的コミュニケーションで、自然発生的におき、本当の意志をききとるのに重要要因になる。

2. イントネーション 3. 音調 4. 速度
5. ストレス 6. ポーズ 等が上げられる。

特に6. ポーズは、音声的で、非言語伝達で、もっとも意味を持つシグナルの1つと言える。非言語的ポーズは言語のメッセージの1部ではなく、話し手が思考したり、最適な言葉を搜したり、自分の発言をさらに続けようとする時に使用されると言える。非文法的ポーズは心理学者にとって、非常に感心のある課題であり話し手の思考の過程を明白にするのに一助になっている。さらに精神科の医者と患者の会話をとり上げてみよう。

患者が感情的なやみを伝達しようとするが言語運用にならない場合、医者は患者の一語一句、ねばり強く聞き出し、その時のポーズが患者の内面の動きを把握出来ると言われている。

日常会話では、周辺言語を余り意識しないが、実際には、かなり非言語によって人びとの感情、意志が表現されている。本を棒読みしているような会話をする人はいないし、嬉しい時や悲しい時等、音声的にも非音声的にも言語行動に伴って表現される。つまり、音声言語によるメッセージをより効果的に伝える力を持っているといえるのである。

◎身振り言語について

身振りは自分自身を素直に表現する一つの方法である。Birdwhistellはコミュニケーションにおける身振りの重大さに着目し動作学を考え出した一人である。

① 顔の表情

Ekman and Friesen は表情伝達する感情のカテゴリーの内容として以下の7つをあげてる① 幸福感 (happiness) ② 怒り (anger) ③ 驚き、④ 恐れ (fear) ⑤ 嫌悪 (disgust) ⑥ 悲しみ (sadness) ⑦ 興味 (interest)。これらの7つのほかに屈辱感 (insult)、当惑 (embarrassment)、決意 (decision) 等で加えて考える者もいる。顔の色々な表情によって上述の様な感情で伝達すると同時に、相手に対する価値判断・興味の有無、その場の状況に対する注意の程度、理解の有無も情報内容の因子であるとしている。

② アイコンタクト

目線、視線をどこになげかけるか、相手とのアイコンタクトを交す時間、何気なく相手をちらっと見るか、それともじっとみる凝視であるか等の目の表情等によって相互関係を導く、大きな要因になる。

③ ジェスチャー

手や腕を中心とした身体の動きであるが、Ekman and Friesen は次の5つに分類している。① 語彙的しぐさ (emblems)、② 例示的しぐさ (illustrators) ③ 情動表出 (affect displays) ④ 発話調整動作 (regulators) ⑤ 副次的記号表現 (adapters) コミュニケーションしようとする意志をはっきり出し、伝達することばを明かくにする時に使用される。

④ 姿勢

人間がコミュニケーションのいろいろな場でのるものごし、身構え、または態度といったものをさす。人間のとる様々な姿勢 (posture) は権力、同意、反応、親近感といった意味あいを伝える役目を果たしている。

◎ 空間行動

コミュニケーションの物理的次元に関与しているこれは3つに分類

が出来る。

① 距離 ② 時間 ③ 位置 である

コミュニケーションを円滑にするためには対話者間のへだたり（距離）が重要な要因である。自分の真意を伝えたい時に距離間を調節し、相互関係を円滑にする。

時間は、視線や目線を交す長さや、相手との対応の間、等がある。これらの時間が相互関係の濃さを表現するのに1つの手がかりになる。相手と対話をする時に、立って話すか、すわって話すか、上座、下座といった具合にどの様な位置を選んですわるか。相手との角度、座わる順番等、非言語伝達におけるある一定の情報を伝達する媒介となっていると考えられる。^③

非言語メッセージは、国、文化により多様で自国の文化に従ってジェスチャーやしぐさをして外国の人に誤解をまねく場合がある。また自分の意志表示を少くない語彙で表現するより、自国のジェスチャーやしぐさをして理解してもらえさえる。英語の授業の時に教師が教科書の1単元の中で、ジェスチャーやしぐさに関する話題が記載されていれば異文化習得の最適なチャンスであり、英語学習の上一挙両得で進んでその話題に入り楽しい授業にしていくべきである。非言語コミュニケーションは情報伝達をすみやかに、明確に、心のこもった言語を伝える上に大きな原動力になると言える。そして話し手のその人らしさをあらわす上になくてはならないものである。

5. 外国語教育と心理学のかかわり方

教育とは教師と学習者の掛け橋である。外国語教育の教授法はいくつありますかと聞かれる。教室の生徒数だけあると答えたい。教師と学習者を結びつける数だけあると言える。教師に多くの事をもとめる事は出来ないが、それぞれの教師の持ち味を大いに活用し、学習者の能力と性格を理解

した上で、その目的にあった教授法を作り上げていくべきである。教育単位（集団）をなしている場合であっても、1時間の授業には必ず対一の関係を持ち、個人とのつながりを大切にしていけるべきであろう。自分の心を相手に適切に伝達し、相手の心を理解出来る能力を培われるようにしていきたいと願う。その時には当然 verbal linguistic competence と non-verbal competence も一役かうのである。又、時には社会的習慣、心理面でも適応しなければならない時もある。言語を学習する時に「心像」(image) という言葉を用いて「価値 (value) の心像」及び「事実 (fact) の心像」という2つの要素に言及したのは Mowrer である。彼によるとこれらの image と fact の要素は内面的と外面的側面と呼ばれ対応的な関係を示す。内面的側面とは情感（喜び、悲しみ、驚き、不安…）の大きな要素を持つ。一方外面的側面は感覚（視覚、触覚、臭覚等）に関わっている。それでは言葉を使用して「意味」を理解するにはどのような過程をたどるのであろうか。Osgood の媒介説の中であきらかにされている。ここでの彼の決定的概念は「記号」である。「対象そのものではない、ある型の刺激がその対象の記号となる。それが媒介反応をひき起こし、その媒介反応が(a) 対象によってひき起こされる全体行動、(b) 区別可能な自己刺激過程を生じる、(b) の場合は対象以外の刺激と対象刺激とが以前に連合していないような反応を示す時である。⁽⁴⁾

外国語教師は言葉の持つ意味を学生に把握させようと指導を試みる、その時に Osgood の外国語教育と心理学の公式がひき出される。(1) 代表関係 (representing relation) (2) 媒介関係 (mediating relation) (3) 感情移入関係 (empathic relation) (4) 伝達関係 (communication relation) である。

- (1) 代表関係—記号とその指示物との間に存在する関係のことを示す。
それは、その言語を母国語とする人が事物を位置づける範ちゅうに関係する。

- (2) 媒介関係—自己刺激とあらわな反応の間関係を指すもので、習慣の階層から構成される関係であり、習慣の階層の相互的強度はそのときの文脈条件と一般的文化要因に依存する。
- (3) 感情移入関係—記号にむけられる反応と表示される対象にむけられる反応間関係である。
- (4) 伝達関係—媒介過程と特定のクラスに属する道具的技能の系列(言語技能)間関係である。⁵⁾

この4つのrelationをかみあわせて、初めて外国語を導入する場合のpsychological aspectsを考えてみることにする。Robert L. Politzerによると、口の中にcandy (physical stimulus)を入れてみる。そのcandyの名前はgum dropと言々、その名前を聞くと、唾液分泌と共によこび(reaction)を表現することがある。例えばcandyを与えずともgum dropという名前を聞いただけで、甘さ、喜びの反応を示す。いわば名前を聞いただけで音声のsymbol—単語・形体—構造の応答・反応—意味といった一連の流れが生じる。

特に外国語を学習する際にはS (physical stimulus) + A (name) + A' > R (reaction)、といった具合に複雑化していく。A'とは母国語と新しい国語の相互関係が生まれ、母国語の音、構造、意味を理解している上で大きな傷害になりcommunication スピードを遅らし、意味疎通がうまくいかなくなる事が多い。年齢を重ねると共に、A→A'の関係は必然的に生れ場合によっては傷害よりもreactionを早く作り出すのに有効になる事もある。

さらに第2外国語の基本的学習タイプには、刺激、反応の関連に加えて、成就の結果として個人が受ける満足度を含む。特に、幼い子供は、特に音に反応し回りの状況に注意を払い、学習し始める。反応が希望どうりの満足の結果で生まれると自然に失敗は少なくなるものである。子供が手あた

りしだい音を作り、構成していく過程で回りの人、特に両親の反応、是認を確認し communicate が成立し、自分の意志を伝達する事が出来る。

次に、教室内の学習を考えてみよう。教師によって作り出された音を生徒が意識的に模擬し、それが新しい学習行動の声となる。教師もその時の反応に対して、出来ばえが良ければほめ言葉を与えることが何よりも大切である。特に低学年の生徒に新しいことばを導入する際に、最初の日から生徒はそのことばを実際に使い、楽しみ、満足感が自然に生まれる様に指導すべきである。生徒は学んだことを実際に使う事が出来るのにという充分な成就感を学習の当初から経験していく事が大切な事である。そして、教室において生徒一人一人に活発に参加 (participation) する機会を持たせる。従来の伝統的な教室指導方法では見受けられなかった教育姿勢が必要であろう。それは個々の生徒の学習に綿密に注意を払い観察し、コミュニケーションを図る様に努める。

理解、判断力のある学習者には、その場にふさわしい返答をし、とまどっている学習者には、すぐ援助の手を差し伸べて、出来るだけ自主的に発表出来るチャンスを与え、発信的な授業を構成していくべきである。このような授業を進めていくためには教師の側に創作 (inventiveness) と機知 (resourcefulness) の才が要求される。教師は教材の提示の仕方を変化させたり、おもしろくて好奇心を作る場面に生徒を強引に引き入れて、今まで習ったことばで自分の思う事を言いたいという自発的な要求 (spontaneous desire) を感じさせる機会を、絶えずいちやく作る事が出来なければならない。⁽⁶⁾

communication のやりとりの中に含まれる感情的因子を考えると、外国語での自発的な表現というのは、生徒が教師や級友どうしとくつろいだ気分になれるリラックスしたなごやかな雰囲気の中でのみ発達できるように思われる。話し合いのための話題は学習者が何か少しでも話せそうなもので、他の人に刺激を与えて情報を加えさせたり、反論を述べさせたりで

きるようなものでなければならない。教師自身も誤りを訂正するといった態度よりも、むしろ、生徒を励ましてやる態度でのぞみ、すべての学習者が、いくらかずつ性格の許すかぎりにおいて参加できるような方向に会話を向けていかねばならない。

6. 教室における教師と学習者の相互関係

マレシャの外国語クラスの中級2年生を対象にしたコミュニケーション授業 (Excerpt 6.1) を参考にして、相互関係を解明したいと思う。教師、学習者共に同じ母国語を話し授業中は英語を使って展開することを前提とする。英語の教科書に出て来ている advertisement の語いを学習する事がテーマである。

授業に入る前に友達や親戚に clearance sale で買物したいと気持ちを伝える手紙を書く宿題が与えられている。

Academic task structures と Social participation structures がこの学習において同時に操作出来る様に指導する事が条件である。授業の連続性は学習者の応答が不正解であろうと無視をしないで、また発端にもどり、懇切、ていねいに導入していく方法である。例えば What is this advertisement about? Peersak と Milo の答えは正しいとはいえない。4にもどり What is the word that used there? 教師は次の質問を切り出す前に肯定的な応答をくりかえす。Suchada が clearance sale の応答をして turn 5 に会話がむけられ What word does it come from? の質問が始まり、教師と生徒の相互関係の源が自然に芽ばえてくる。教師は正しい応答を聞き出すため、教師は話の発端にもどり不正解な応答を評価する。excerpt を連続して行くにつれて Academic task structure と Social participation structure が徐々に身についていく。

12-24にかけて、Academic task structure は、まず、店頭的位置を認め、さらにその状況における目標を確認する。最後の目標についてくりか

えし、首尾一貫した pattern が続く。

13で Peersak が Ground floor と答え、教師はそれに対して肯定的な評価を与えその状況の話題を確認しあう。何を購入するか、さらに詳しくどこで作られたか、カメラの価格、安売りの価格へと導入していく。Academic task structure と Social participation structure が共に維持し連続化されていく。

24-32。教師は異なった品目を選択する。その状況をたずね、その状況における品目を確認する。会話が進むにつれて、教師の使用する言語の唯一の変化は正しい応答の肯定的な評価を引き出し、それをくりかえす事なく次の話題へ進む。25. First floor と応答するとすぐに、What can you buy there? へ進んでいる。さらに詳細に質問していく。生徒の応答のくりかえしよりもまとめようとしていく。いわば Academic task structure (その品目にかかわる状況、品目の特徴) 等をみとめ始め応答していく。教師は生徒の肯定的な評価をひき出し始める。25の中で Milo が直接 stainless steel kettles と答え、その後すぐに教師が How many styles of kettles? へと進む30と34では Milo は応答をくりかえしているがそれは、まとめとして進行させている。

34に入り、教師は Suchada に if you want to buy a rattan picnic basket, which department will you go to? とたずね、話題を変える。

35で Suchada : First floor. と答える。教師が要求しているものは which department...? であって which floor をたずねているわけではない。このような状態になると教師は否定的な評価を与え、不正解を無視し他の糸口 (導入方法) を与える。which department? とたずねられ Flower department と答え、教師は肯定的に答え、同意する。教師は又 where does a rattan picnic basket come from? にもどる。教師がもとの話にもどるという事は、生徒がある情報のわくにはめこまれた意味以上に Academic task structure の中に加わり、自分のおかれている状況を正確

にみとめ応答しようと努めている。時には Suchada が Academic task structure を無視した場合には、教師は手早く生徒がまちがいを訂正しようとする応答に向きを変え、Academic task structure を再び作り上げる必要がある。教師は communication の pattern を指導すると同時にその会話の流れ全体を把握している。それによって preformulation と reformulation の相互的やりとりをくりかえす事になって communication が成立している。

この excerpt の質問の中にある What is this advertisemant about? の “advertisemant” の語彙の意味を学習するために What is this advertisemant about? の質問に固定化し、生徒がいかに答えれるか教師が指示を与えている。生徒が正解を与えない場合は4の中で What is the word that is used there? という様に単純でわかりやすい言葉を使つての質問するのである。この様な戦略で Suchada は正しく応答する事が出来る。教師は学習されていない語彙が出て来た場合、この excerpt の中で8、42で2回わかりやすい言葉でくりかえし、質問している。8の中で、教師は clearance sale という語いはまだ学習していないため、あらためて what word does it from? とたずねると Peersak は clear と答え Suchada は “To clear up” と応答する。又42の中で what is a flask holder? とたずね flask と holder を分けて確認し what about holder? といった具合に質問している。この様に学習されていない語いに学習者が出くわした場合、教師は、その意味をどの様にして言語から引き出していくかは教師の持つ知識、判断力が、大きな力になる。授業展開を効果的、興味深いものにしていくと思う。この授業の進め方は場合によっては単純であたりまえの様に思われるが ・学習者がいかに参加し応答するか ・教師の質問内容がどの程度理解しているのか ・学習者の積極性が除々に生れて来ているか ・さらに学習者の応答が以前学習された文章を組み立て、自分の意志をはっきり伝達出来ているか、等を教師がたえず確認しながら次の質問、

話題へ導入していく。授業とは知識を伝えるだけではなく、英語を出来るだけ使わせ授業内容のわかるものでなければ心の通った授業とは決していえない。

さらに付け加えたい事は教師は新学期始業開始と同時に、次の様な事を実行して教壇に立ってもらいたいと思う。それは低学年の学習者に対して、特に彼ら達の特技、趣味、他の教科の感心度、友達関係、クラブ活動等を出来るだけ把握しておく。そうする事によりその日の key point に入る際に、それらの事を授業内容にとり入れ指導していくのがのぞましいと思う。学習者は打ち解けた内容には耳を傾け、集中して聞く、それが原因で自然になごやかな雰囲気のカラクルームが出来上がる。授業終了後、学習者は key point をたとえ忘れてしまったとしても、その時の話題が記憶に残るものである。その記憶の糸をたぐっていくと、key point を思い出すものである。くだらない話であったとしても1時間の授業にしめる割合は大きいもので決してむだな時間ではない。教師と学習者の関係は授業が進むにつれて、心が通い合い、信頼関係が芽生えて来る。時間の経過と同時に学習意欲を高め、効果的な学習が生まれてくると確信するのである。

Excerpt 6. 1

1. T : What is this advertisement about?
2. Peersak : Radio...sale.
3. Milo : Cheap sale...
4. T : What is the word that is used there?
5. Suchada : Clearance sale.
6. T : Clearance sale. OK, in the first place, do you know the meaning of "clearance sale" ?
7. Suchada : Clearance sale.
8. T : Clearance sale. Let's look at the word "clearance." What

word does it come from?

9. Peersak : Clear.
10. T : Therefore, “clearance” sale will mean what?
11. Suchada : To clear up.
12. T : To clear up, that’s right. To clear up all the goods in the store.
OK, let’s look at the items which are for sale. Where is the photographic department? Peersak, look at the advertisement and tell me, where is the photographic department?
13. Peersak : Ground floor.
14. T : Yes, on the ground floor. Now, if you go to the photographic department, what can you get there?
15. Peersak : Camera.
16. T : A camera. Can you be more specific? What kind of camera?
17. Peersak : A Kodak...Instamatic 76X camera.
18. T : OK, a Kodak instamatic camera. What is the usual price of the camera?
19. Peersak : Twenty-seven and forty cents.
20. T : Twenty-seven dollars, forty cents. And what is its price after the sale?
24. Peersak : Twenty-three dollars, seventy-five cents.
22. T : Twenty-three dollars, seventy-five cents. Now, if you buy that camera what free gift will you get?
23. Peersak : ...Ball.
24. T : A ball. Now, let’s move on to some other department in the store. Milo, where is the housewares department?
25. Milo : First floor.
26. T : What can you buy there?

27. Milo : Stainless steel kettles.
28. T : How many sizes of kettles?
29. Milo : Five.
30. T : OK, these stainless steel kettles come in five sizes. And what is the special feature of this kettle?
31. Milo : Imported.
32. T : What other special features?
33. Milo : Movable handle.
34. T : Yes, they have movable handles in addition to being stainless steel. OK, now, Suchada, if you want to buy a rattan picnic basket, which department will you go to?
35. Suchada : First floor.
36. T : Which department?
37. Suchada : Flower department.
38. T : Yes, flower department. Where does this picnic basket come from?
39. Suchada : China.
40. T : What is its special feature?
41. Suchada : Complete with tray and two flask holders.
42. T : Yes, and what is a flask holder? You know what a flask is, right? What about holder? It comes from the word "hold."
It holds the flask. OK, all right... ⁽⁷⁾

7. 外国語教育と社会のかかわり方

言葉は、母国語であり外国語あれ、社会の中で生きている。社会を離れてことばを学習する事は不可能である。Canale & Swain (1980) は伝達能力を3つに分けて説明している。それぞれを文法能力 (grammatical

competence)、社会言語能力 (sociolinguistic competence)、ストラテジー能力 (strategic competence) と呼ぶ。文法能力は、その言語で文法的に正しい文を自在に作り出せる力。社会言語能力はある状況で適切な表現や変種・文体を選び、瞬時に対応できる力。そしてストラテジー能力はさまざまな伝達方略に通じ、意志疎通の中断をうまくかわして話を続けられる力である。Canale は数年後、その三つに加えて、複数個の文を滑らかに結びつけ、話の筋の流れを自然に進められる談話能力 (discourse competence) の重要性を主張した。^⑧

言語理論を重要視する言語能力・文法能力ばかりではなく、実際的な言語使用し言語運用する事が英語教育の中にも改善されて来ている。

例えば、平成元年3月15日に告示された中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領改善方針とり上げてみよう。

「中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培う事を重視する……途中省略
外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、外国語の実践的な能力を身に付けさせるとともに、外国についての関心と理解を高めるよう配慮する……以下省略^⑨

以前の学習指導要領にはなかった‘コミュニケーション能力’ ‘積極的な態度’ はひときわめだち、重要な意味を持っている。この能力と態度が一体化し、育成されなければならない。積極的な態度は以前から使われていた学習態度とかさね合う部分もあると思う。言語習得研究の中に分類されているコミュニケーション方略 (communication strategies) と学習方略 (learning strategies) をとりあげてみよう。

新学習要領に使われている積極的な態度は言うまでもなくコミュニケーション方略に該当すると言える。コミュニケーション方略とは話し手が表現したいと思っている内容を適切かつ正確に表現出来る言語能力に欠けている

ために起こるコミュニケーション上の問題を切り抜けるための方略である。
その様な状況を克服するために Savignon によれば、

- (a) 適切な語彙が思いつかなかったらどうするか
- (b) 自分が考えをまとめるために言い淀んでいる間も相手とのコミュニケーションを絶ち切らないようにするにはどうするか
- (c) 相手が使った単語や表現が理解出来ない時にそのことをどう伝えるか
- (d) 自分が伝えたいことが相手に理解されていることがわかったらどうするか
- (e) 相手が速く話しすぎていて理解出来ない時どうするか

この様な状況に対応するための方略を Tarone (1983) は、次のように
列挙している。

- (a) 言い換え (paraphrase)
近似表現 (approximation)
造語 (coinage)
回りくどい言い方 (circumlocation)
- (b) 借用 (borrowing)
逐語翻訳 (literal translation)
言語転換 (language switch)
助けを求めること (appeal for assistance)
身ぶり (mime)
- (c) 回避行動 (avoidance)
話題回避 (topic avoidance)
伝達放棄 (message abandonment) ¹⁰⁾

以前から日本の中学校・高等学校において「話すこと」の言語活動は教師達により色々と工夫され、研究されているが、さらにコミュニケーション方略を理論的にも実践的応用して行くべきである。特に、感性を高め言

語生活を豊かにし人間関係を深める言語活動をふりかえってみる事も必要である。その時に、言語が個人の次元と生活領域に使われていると同時に社会の次元とその領域でも使われている事を考えてみてはどうであろうか。個人の言語は社会言語と共存していく過程で質を高め量を増やしていくのである。低学年であればある程、個人の言語領域のみ使用し、年令と重ねていくにつれて社会生活で一般的に言葉が使われる視点から言葉を使っていくのである。

外国語学習において、この二つの次元を習得する事はもちろん大切な事である。しかし、個人的レベルでの言葉を社会的なレベルにおいて機能する社会言語へと高めていく事を少しずつ学ぶことが必要である。¹⁰⁾

たとえば、教科書の中に出て来る題材を色々な角度（社会、経済、文化、科学、地理）からとらえ多面的な学習が必要である。こういった状況で教師側から解決案、方法を与える必要はない。学習者自から考えを出し、自分の知識領域を拡大し、さらに認知能力を活性化する事が社会生活言語への一歩であると思う。ことばは社会の変化にともなってその影響を受けて変化していく。従って社会の変化にともなって学校で学ぶ内容も、それに反映していかなければならない。我々教育者は、現代にあった内容の新しさ、多様性に富んだ授業内容が要求されていくのではないだろうか。

8. 結論

従来の伝統的（レクチャー型、教師主導的）な教授法から除々に発信型の授業（learner-centered approach）へと傾きつつある。

生徒からの自主的な活動が生み出すには教師と学習者の心が通っている事が第1条件になるだろう。教育とは単に知識や技術を伝えるだけでなく、教師と学習者の人間的な触れ合いから始まるのである。従って教師は学習者の共感を呼び、ひきつけるものを持っている事が大切である。これは学問的技能のみならず人格的特性も加わる。

すばらしい人間性と英語力と指導力がそなわった時に理想的な教育が自然に生れてくる。この様な教育環境のもとで学習者の自主的な活動、発表が生れてくる。時には教師は傍観者となって授業の流れを見、適切なアドバイスを与え授業の展開の円滑油になることも場合によって必要な事である。

今回は特に教室での教師と学習者が授業する上にもっとものぞましい関係、効果的な学習法の一面を報告しました。今後さらに教師と学習者の相互関係について考察していきたいと思う。

参考文献

- (1) 橋本満弘 英語コミュニケーション論 学書房
- (2) W. M. リヴァース著 外国語習得のスキルその教え方 研究社
- (3) 高梨唐雄他 英語コミュニケーションの指導 研究社出版
- (4) ビビアン・クック 第二言語の学習と教授 研究社
- (5) 横田勉 外国語学習の視点 リーベル出版
- (6) 田中春美 社会言語学への招待 ミネルヴァ書房
- (7) George E. Wishon, Thomas J. O'Hare : Teaching English. American Book Company
- (8) Jack C. Richards, Charles Lockhart : Reflective Teaching in Second Language Classrooms. Cambridge
- (9) Karen E. Johnson : Understanding communication. Cambridge
- (10) 塩澤利雄他 新英語科教育の展開 英潮社
- (11) William Littlewood : Communicative Language Teaching. Cambridge
- (12) 松田まゆみ他 発信型英語教育の実践 三修社
- (13) 鈴木恭史 コミュニケーションの力をつける英語教育 開隆堂出版
- (14) 萬戸克憲 国際化と英語科教育 大修館書店

—— 註 ——

- (1) 高等学校学習指導要領解説 文部省 P 6
- (2) 北海道武蔵女子短期大学記要・27号 P10
- (3) F. ロボ、津田葵他 英語コミュニケーション論 大修館書店 P 38~40
- (4) Wilga M. Rivers、五十嵐二郎 外国語教育と心理学 紀伊国屋書店 P129
- (5) 同上 P131~132
- (6) W. M. リヴァース 外国語習得のスキル 研究社 P46
- (7) Karene. Johson : Understanding Communication in Second Language Classrooms P94~96
- (8) 田中春美他 社会言語学への招待 ミネルヴァ書房 P209
- (9) 高等学校学習指導要領解説 文部省 P 6
- (10) 小池生夫 第二言語習得研究に基づく最新の英語教育 P219~220
- (11) 横田勉 外国語学習の視点 リーベル出版 P37